

カントの《批判的方法》再考

——「批判」ということでカントは何を理解しているのか*

渡 邊 浩 一

「批判 Kritik」とは、カント哲学の代名詞とも言うべきものでありながら、それ自身については立ち入って論じられることの少ない概念である。『純粹理性批判』（以下『批判』）やそれ以降の著作でカントは「純粹理性の批判」(AXII)「超越論的批判」(B 26)「批判主義」(VIII 226)といった語句を用いて自らの思想内容を語っているが、当の批判概念については特に説明を行っていない。このため「批判」は、「超越論的 transzendental」——すなわち、よく知られた説明に拠れば、「アプリアリに可能である限りでの、諸対象一般についてのわれわれの認識様式に関わる認識」(B 25)——等の概念に引き寄せられ、既にそれ自身「アプリアリ」な可能性の制約の探求という含意を持つものと解されがちである。

しかし、当然ながら「批判」は「超越論的」とは別の語であり、独自の文脈・意味連関を持つ。また、『批判』でカントは、「超越論的批判」をアプリアリな諸原理（・諸制約）

の体系への「予備学」とし、体系そのものである「超越論哲学」と区別しており (vgl. B 25f.; A 841ff./B 869ff.)、ここからも、「批判」と「体系」との対比が「アプリアリ」や「超越論的」とは異なる観点に拠っていることがうかがわれる。その射程を見定めるためにも、「批判」という事柄を当の概念に即して説明・規定しておく必要があるように思われる(1)。本論文では以上のような理解から、カント自身の用例に密着してその「批判」理解の跡づけを試みる。先に触れたように、「批判」以降の著作では、カントの学説・体系構想の前景化に伴い「批判」の語義が見えにくくなっているが、遡って六〇〜七〇年代の——『批判』に至る思想形成期の——講義録には、この概念の受容と形成のありようを伝えるかなり具体的な記述が見られる。これをもとに本論では「批判」の語を、他の概念や特定の学説内容に還元することなく、その固有の意味連関に沿って規定してゆくこととした。

論述は具体的に次の三つの観点から、それぞれ概ね時系列順に進める。すなわち、まず、ドグマティズムと懐疑論の伝統的二項対立からカント特有の《ドグマ・懐疑・批判》という三幅対へと至る過程に着目し、「批判」の語の外的連関を明確化する(一)。次いで、その語が導入される歴史的背景を確認の上、この「批判」が「ドクトリン」、ひいては《ドクトリン・ディシプリン・学》という系列と対比的に捉えられるような内実を持つことを示す(二)。以上によって明らかになる「批判(的方法)」の一般的性格を考慮しつつ、最後に、特に哲学・形而上学について遂行される「批判」の基本性格・姿勢を、*subjunctive* という語を用いてなされる「批判哲学」の説明に即して浮き彫りにする(三)。語の調査・規定に当って、当然ながら個別には先だつ諸研究と重複する論点も含むことにはなるが、批判概念の諸側面を取りまとめ、その意味連関の全体的規定へと向かうなかで、従来の記述の不足を補うとともに一定の新たな——というよりは、ともすると自明のものとして看過されがちなこの概念に改めて注意を喚起するような——論点をも示しうるはずである。

一 《ドグマ・懐疑・批判》の三幅対の形成以前

——「批判」の語の舞台背景

「批判」をカントは《ドグマ(的方法、・ティズム)および《懐疑(的方法、・主義)との相互連関において捉えている。両項は「批判」との関係に応じて肯定的にも否定的にも理解されうるが、『批判』では主に、「ドグマティズム」「懐

疑論」「批判」という形で形而上学の歴史的進展の諸段階をそれぞれ指し示すとともに(第一版序文など)、「ドグマ的方法」「懐疑的方法」「批判的方法」という形で学としての形而上学に至るための一連の方法を規定するものとして(弁証論および方法論、二重の観点から用いられている。前者の「ドグマティズム」と「懐疑論」とはともに克服されるべき立場に対する否定的なレッテルであり、他方、後者の「ドグマ的方法」と「懐疑的方法」は「批判」に対して一定の積極的な役割を担うものでも)。(vgl. A IXf, A 485f/B 513f, A 856/B 884, usw.)。

このように《ドグマ・懐疑・批判》の三幅対は、カントが自らの『批判』を従来の哲学との関連において歴史的・方法的に位置づけるための基本的な枠組みをなすものであるが、そこから後年、いわゆる批判期の著作においてカントは、他派との論争や自身の体系の展開といった問題関心に基づいて、『批判』の境位・学説を「批判主義」とし、「ドグマティズム」および「懐疑論」の段階の哲学・形而上学からの進歩を語るようにもなる(vgl. VII 226f, XX 262f)。さらに後世、この「批判主義」を頂点とする三幅対が哲学史記述においても少なからぬ影響力を振るったことは、よく知られている通りである(2)。

「批判」のこうした位置づけは、しかし、哲学的には決して自明のものではないし、また、カント自身の思想形成の上でも所与の枠組としてあったわけではない。周知のように《ドグマ》と《懐疑》とは、古代の懐疑派において、何らか

のドグマ(教説)に関して、それを主張する「ドグマテイスト」とその積極的定立を保留する「懐疑論者」の二項対立という形で捉えられていた。近世初頭の懐疑派思想の復活・流行に伴い、この対比はカント周辺でも広く用いられるが、(知られている限り)そこに第三の語として「批判」が登場することはなかった。そして少なくともある時期までは、このことはカントにおいても同様である。

まず、一七六〇年代前半の講義録『ブロンベルク論理学』を見よう。ここでカントが認識の確実性をめぐって「疑い Zweifel」について考察するに際して手引きとしているのは、「ドグマテイスト」と「懐疑論者」の間の次のような二項対立である (vgl. XXIV 205-218)。

それにしたがえば、まず「ドグマテイスト」とは、「一般的な理性の真理について、それらが完全な確実性と信頼性へともたらされうるとの判断を下すが、ただ、依然なにがしかの疑いにさらされている。またはさらされうるといふような理性の真理の考察にはいささかも関与しない哲学者」(XXIV 205)をいう。このときモデルとされているのは数学者で、「彼は命題をまさしく、その判断が生じえないということがまったく不可能であるように決定的に証明する」(XXIV 206)。それゆえドグマテイストの方法は、数学のように確実な認識を出発点として論証や体系を展開しうるところでは積極的な意義を持つ (vgl. XXIV 208)。

問題ははしかるに、哲学のように、手持ちの認識の確実性のはっきりしない場合である。同時期の論文『自然神学と道德

の原則の判明性」(一七六四年)でも詳論されているように、カントにしたがえば、数学と違って哲学(・形而上学)においては、与えられる概念がさしあたり曖昧・非判明であるため、まずその概念の分析から始めなくてはならない (vgl. II 276ff.)。逆に言えば、こうした場面で分析を抜きに数学を模して論証・証明に向かうならば、論理的には正しくても内容的には不確かな認識がもたらされてしまう。つまり、そのときドグマテイストの方法は悪しきドグマティズム、いわゆる独断主義に陥ることになる。

それゆえ哲学的認識のように、まずその真理性・確実性が問われるべきところでは、むしろ懐疑論者の方法こそが評価される。すなわち『ブロンベルク論理学』で言われるように、「懐疑論者たちには、そうはいってもやはり「……」驕れるドグマテイストよりも哲学にとつて何らかはるかに益するところがある」(XXIV 208)。ここで懐疑論ないし懐疑的方法とは——両者をカントはまだはつきりとは区別してはいない——次のようなものをいう。

さて懐疑論、または懐疑的な疑いの方法とは、自分自身に疑惑を抱き、所持している認識を前もって再度熟考し、そうしてそれを完全な確実性へと至らしめようとするもので、これは理性のカタルクティコン Kathartikon、すなわち最高の浄化手段である。これはできる限り多くの誤謬を防ぎ、人間をよりいっそうの探求へと導くもので、事柄の真理へ「……」達する方途である。(XXIV 208)

以上のように、ドグマティズム（ドグマ的方法）と懐疑論（懐疑的方法）は、手持ちの哲学的認識・命題に関する相異なる態度として理解され、確実性・真理の探求という観点からして特に後者が積極的に評価される。これが六〇年代、『プロンベルク論理学』の時点でのカントの方法論的立場である。ここでは伝統的な二項対立が踏襲されており、「批判」の語は記述としてのみならず、概念の内容規定からいっても占めるべき位置を持たない。

ただし、確実性・真理の探求という近世哲学の共通課題の受け止め方を見れば、やがてカントがこうした「懐疑」（という語）の立場を踏み越えてゆくことになる理由の一端も、ここに同時にうかがい知れなくもない。上の『プロンベルク論理学』等の記述に現われているように、カントは哲学（・形而上学）において「驕れるドグマティスト」をこそ斥けるべき相手と見ており、そのことから懐疑論も、論駁・否定されるべき対象としてよりは、真理探究の方法・手段に関わる肯定面において受け止められている。とはいえ、何らかの認識を積極的な主張として語る「方法」のためには、いわゆる判断保留を基軸とするような「懐疑」では、語の成り立ちからしても十分には意を尽くしえないように思われる。

現に一七七五年の『哲学的百科事典』ではこうした推定を裏づけるかのような展開が示されている。ここでカントは、枠組自体は旧来の二項対立に拠りながらも、以下のように「懐疑的方法」の内実を別の語——すなわち「批判」——によって説明するに至っている。

ドグマ的方法とは主張する方法であるが、それは必然的に確実であるような認識のもとでのみ与えられる。〔……〕

大いに真理の仮象「見かけ」を持ち、そのためドグマ的であると見なされるような諸認識の一部門がある。しかしながら、古人が夙に洞察していたように、ここでは懐疑的方法は批判 die Kritik を目的とする。こうした諸認識に矛盾点を呈示することで、われわれはそれら諸認識において確実性へと到達することができる。(XXXIX 28)

カントにしたがえば「ドグマ」とは——「構成に基づく」理性認識としての「数学的認識」に対して——「概念に基づく」く「必然的に確実である理性認識」であり (vgl. XXX 27)、上述のように、哲学（・形而上学）はその「概念」の性質上、当初はこれを持たない。そのため、哲学はこうした「ドグマ」が確立されるまでは「ドグマ的方法」を有効に用いることはできない。にもかかわらず、この方法を未だドグマならぬ認識に即して越権的に用いるならば、そのときわれわれは「ドグマティズム」へと陥ることとなる⁽³⁾。

したがって問題は、いかにドグマティズムを回避しつつドグマの確立に至るかということであるが、ここでのカントは、その方法を考える枠組については依然『ドグマ・懐疑』の二項対立に拠っている。ただし、その内実については——『批判』のアンチノミー論を想わせるような——かなり踏み込んだ理解を示している。引用にある通り、ここでカントは「懐

疑的方法」の目的を「批判」とし、そのための具体的手法として、ドグマティズムの淵源たる見せかけの諸認識にその「矛盾点を呈示」することを挙げている。こうした意味でカントはまた、「懐疑的方法はそれゆえ思弁的諸認識には是非とも欠かせない。ただしそれは懐疑的哲学とは区別される」(XXX 28)とも言う。方法意識の強まりと併せて、「主義(論・哲学)」と「方法」とが明確に区別されるに至っていることも注目される。

しかしながら、その一方で、懐疑的方法によって「矛盾点を呈示」することが、なぜ、また、どのようにドグマの確立に繋がるのかについては依然不明瞭である。この『哲学的百科事典』の記述のうち、一連の《ドグマ》理解は、『批判』以降にもそのまま引き継がれることとなるようなまとまりを示しているが (vgl. A 736/B 764, XXIV 530)、『ドグマ・懐疑・批判』という三幅対は依然萌芽的なものであり、「批判的方法」が旧来の二項に対して——「批判」固有の意味を伴って——位置づけられるには至っていない。

いったいカントは「批判」という語をどこから汲み取り、どのような理解からこれを「ドグマ」と「懐疑」の両項に対する第三の項として位置づけることとなるのか。それが(アンチノミー等の)思想内容の熟成と歩みを共にしていることは引用の記述などからも確かである。また、しばしば言われてきたように、対立する二者を第三の立場から調停するという発想は処女作以来のカントの思索の性向でもある。しかしながら、「批判」を単なるレットテルとして理解するのではない

限り、いずれにせよ当の——ここまで見てきたような、六〇年代から七〇年代にかけての少なからぬ変動・試行錯誤の末に形成されたはずの——言葉に即した概念的把握・規定は不可欠である。そのためにも次節では、改めて「批判」の語に焦点を絞り、その受容の文脈と固有の意味連関に迫ることとする。

二 「ドクトリン」と批判とは互いに区別される」

——「批判」の語の出自と位置づけ

「批判」の語が一八世紀当時のヨーロッパにおいて一種の流行語であったことは今日よく知られている。これは「危機 Krisis」や「基準 Kriterium」とともに、元来「分離する separate」、引き離す *put asunder*、区別する *distinguish* などの意を持つギリシア語の動詞 *kriwō* に遡り⁴⁾、古くから医学、法学、文献学、哲学など多くの分野に跨って用いられてきた語であるが、下って、ルネサンス期の古典文献・教典批判が他分野にも転用されるなかで一般化し、啓蒙期に至ってその時代精神を体現する言葉の一つとして特に頻用されるようになる⁵⁾。その意味で「批判」序文に見られる「われわれの時代は批判の本来の時代である」(A XIam, vgl. XVIII 287f., XXVIII 540)という言葉は、なごした同時代的な了解に連なりつつそれをさらに先鋭化するような状況にあった一八世紀後半のカントの歴史的位置を的確に示すものと言える。

もともと、そこから当のカントの「批判」の出所へと視線を転じるとにわかに見通しがききにくくなる。上のような当

時の共通理解に拠っているためであろう、「批判」にも公刊著作にも具体的な記述は見られず、そのこともあつて従来、断片的な記述をもとにしばしば言われてきたのは、文献学的批評や当時新たに興つた美学的批評との関連である(6)。

しかし、これはいささかミスリーディングな説明かと思われる。前節と同様六〇〜七〇年代の講義録に見られる多少なりともまとまつた記述を見るならば、むしろ広義の——修辭学も含むような意味での——論理学を背景とするものと考えられる方が実状に適っている。

そこでまず注目されるのは、『ブロンベルク論理学』(六〇年代前半)の次の用例である。

オルガノンたる論理学は、既に持ち合わせている学識に規則を指し示す *Regeln vorschreiben* ことができるか「……」、または、学識へと達しうる規則を指し示すことができるか「……」、いずれかである。論理学はすべてドグマ的ではなく批判的 *Critisch* である。(XXIV 20, vgl. XXIV 26, II 310, usw.)

「批判的」という語はここで、「ドグマ的」との対比において、「論理学」の説明のために用いられている。問題はその際の「批判的」という事柄の内実、および「ドグマ的」との対比のポイントということになるが、ここでは「規則を指し示す」という記述が目を引くとはいへ、このことと「批判(的)」の語との関連ははつきりとは説明されていない。

しかるにこの点は、一七七二年の『フィリップ論理学』において、「美学」と「論理学」の異同を説明する次のような記述のなかで改めて明確に示されるに至っている。

感性的なものの評定の規則を講述する *die Regeln der Beurteilung des Sinnlichen vortragen* 批判が美学である。悟性の評定の規則を講述する批判が論理学である(XXIV 344, vgl. XXIV 317.)

ここから「批判」は、ひとまず、「評定の規則を講述する」として理解される。つまり「批判」とは、扱う認識の種類に応じて(狭義の)論理学なり美学(的批評)と同一視されるものではなく、いずれを問わずその認識に対して上のような態度をとることにおいてそう呼ばれるものである(語の出所が「広義の」論理学と推定される所以である)。(7)。

以上を踏まえて先の『ブロンベルク論理学』の記述に戻れば、「既に持ち合わせている学識に規則を指し示す」とは、まさしく「批判(的)」の特色であり、この語はまずこうした態度・姿勢に関して「ドグマ(的)」と対照をなすものと言えそうである。というのは、前節に見たように、カントにおいて「ドグマ」とは《概念に基づく必当然的に確実な認識》をいい、「ドグマ的」とはそうした認識(と場合によっては取り違えられているもの)を出発点にして、いわば前進的に論証を進めることであつたが、これに対して、「批判(的)」とは所与の認識からいわば逆行的にその規則へと向かうもの

と捉えられるからである。

実際、このことはカント自身、『フイリッピ論理学』の序論で「論理学」を規定する際に、「批判」と「ドクトリン」という語の対比において以下のような形で言っている。

普通の健全な理性の論理学は、「……」学的理性の論理学とは区別される。前者はその規則を具体的な諸命題から、経験から講述し、後者はそれを普遍的諸根拠から示す。前者は批判 Critic に他ならず、後者はドクトリンである。(XXIV 314)

規則へと「具体的な諸命題から、経験から」向かう「批判」と、「普遍的諸根拠から」向かう「ドクトリン」の対比が、先の「批判的」と「ドグマ的」の対比と重なるということは明らかであろう。それゆえそのことも踏まえて言えば、「批判」とは、所与の認識——感性的であれ悟性的であれ——から直ちに新たな認識へと向かうのではなく、そこで一旦立ち止まってその規則・基準を問うこと、ということになる。これは同時期の一七七二／七三年冬学期の人間学講義に基づく『コリンズ人間学』において、「趣味の批判」ということに即して語られている次のような言葉からも確かめることができる。

批判 Critic とは所与の対象における価値の研究 Untersuchung である。ドクトリンとは、何か美しいもの

を産み出す仕方の教示 Unterweisung である。(XXV 194, vgl. XXV 385.)

「批判」のこうした基準探求の態度が、真理・確実性の探究という課題にとつて、「懐疑」よりなお一歩進んだ方法理解を示すものであるということもいまや明らかであろう。これにより真理の探求方法は『批判』以降——『ペーリッツ論理学』(二七八九年)を一例として引けば——次のように『ドグマ・懐疑・批判』の三幅対によつて捉えられることとなる。

ドグマ的思考様式の格率、懐疑的思考様式の格率が存する。中間的なものが批判的思考様式であり、つまりあるものをしばらく疑いの余地あるものとして扱つておいて、その後完全な確実性に至る。第一の手續きは、若干の仮象しか手にしていない場合にはあらゆる誤謬を野放しにするものなので、学にとつて非常に有害である。「……」懐疑の方法は批判的方法に非常に役立つ、すなわち、何らかの真理が想定される場合、反対者の立場に自らを置き、そこであらゆる可能な根拠を探究し、その命題を覆し、そうして真理を発見しようとするものだからである。(XXIV 557, vgl. XXIV 885.)

与えられた認識から直ちに論証を進めるのではなく、確実な認識・真理に至るために、一旦その真理妥当を中断して置き、その上で妥当性の基準を解明すること。これはカントの

周知の——ある意味当たり前とも思われる——方法理解ではあるが、とはいえ、そのことを「批判」の語によって捉えるためには、それぞれに固有の背景と意味連関を持つ語をまとも上げる必要がある。カントのそうした概念規定の歩みは以上に見てきた通りである。

実際、そうして形成されたドグマ確立の方法としての「批判」理解は、「批判」と「ドクトリン」という——上の『フィリップス論理学』および『コリンズ人間学』に見られた——もうひとつの対比と相俟って、理論・体系構成をもその射程内に収めたものとなっている。すなわち、「ドクトリン」とは、『フィリップス論理学』の「方法論」での説明にしがえば、「ドグマ的な諸真理」であり、これは「学」へと向かう次のような系列をなすものである。

- a. ドクトリンとはさまざまな認識と学説の連関。
- b. デイシプリンとはこの連関がある方法へともたらされる場合。
- c. 学とはそうした方法にしたがって認識が完全に仕上げられる場合。

(XXIV 483, vgl. XXIV 293, XXIV 600, XXIV 793, usw.)

以上からして「学とは完全なデイシプリンであり」、そしてこの意味で「ドクトリンと批判とは互いに区別される」(ibid.)。つまり、「批判的」と「ドグマ的」の対においては、あるひとつの認識・命題に関する態度が対立軸となっている

のに対して、「批判」と「ドクトリン」ということでは、ある認識をドグマとして打ち立てるための一連の方法と、ドグマとして確立された認識の体系的連関とが対比されていることになる。ひとたび「批判」を経て確立されたドグマは、そこで改めて「ドグマ的方法」による体系化の途につく。そしてそれが「完全に仕上げられ」たとき、われわれは「学」を持つ、というわけである⁸⁾。

まさにこうした論理的な方法・学問理解は、体系構成上のモデルとされることによって、また、そもそもその形式の一般性によって、『批判』の方法・学問構想とも対応・通底するものである。《ドグマ・懐疑・批判》という「方法」についての三幅対は、『批判』では特にその超越論的弁証論において、旧来の特殊形而上学、すなわち合理的心理学・合理的宇宙論・合理的神学それぞれの独断的主張を吟味するため、手順として位置づけられている。また超越論的方法論では、そうした「批判」によって確立されたアプリアリオリな原理を「超越論哲学」へと展開させるための枠組として、やはりこの三幅対、ひいては《ドクトリン・デイシプリン・学》の系列が用いられている。つまり、独断的形而上学を斥け定説的形而上学の建設へ向かう「純粹理性の批判」から「超越論哲学」へのカント歩みは、一般的には、ドグマティズムを回避しつつ(懐疑を経て)「批判的方法」によりドグマを確立し、その上で改めて——《ドクトリン・デイシプリン・学》の系列に即して——「ドグマ的方法」によって学の体系の展開へと向かういとなみとして理解されうるものである。

さてそこで問題となるのは、この「批判」の哲学・形而上学における意義である。以上の限りでは、「批判」とは認識一般について言われうるようなものであったが、カントが特にその必要をいうのは、哲学、それも何より形而上学に關してである。では、このときそのドグマの規則・基準はどこに求められるのか。何を以って「批判哲学」はそう呼ばれうるのか。最後にこのことを、やはりカント自身によるこの語の説明に即して見るとしよう。

三 「主体に即して subjective 哲学する」 ——「批判哲学」の基本性格

カントの批判哲学の形成は通例一七七〇年の『可感界と可感界の形式と原理』から一七八一年の『批判』第一版までの期間——主に「超越論的観念論」という思想の熟成期——に求められる。しかし、既述の通り、ここでの関心は「批判哲学」の名を冠して語られる思想内容の発展史的叙述ではなく、「批判」および「批判哲学」の語そのものの受容・形成過程の探索にある。このような観点に立つときまず注目されるのは、早くも一七六〇年代前半の『ブロンベルク論理学』に見られる次のような叙述である。

その序論においてカントは哲学史に触れ、特に当時の哲学動向に関して次のように言っている。すなわち、「われわれの哲学の努力はすべて」、「ドグマ的」であるか「批判的」である。具体的には、「この批判的哲学者 Critische Philosophen のうちではロックが特に賞賛に値する。しかるにヴォルフは、

また一般にドイツ人は、方法的哲学 eine Methodische Philosophie を有する」。そして、「いまやついに大勢として批判哲学 die kritische Philosophie が活発化しており、その点での最大の功績はイギリス人たちにある」、「おおよそドグマ的方法は、いかなる学においてもほとんどひとしなみに廃れている。道徳ですらもはやドグマ的ではなく、ますます批判的 Critisch に講じられている」(XXIV 37)。

従来さほど注目されてこなかったことであるが、これがカントにおける「批判哲学」の語の初期の用法である。真理・確実性探究の方法に關わる《ドグマ・懐疑》の二項対立とは独立に、「哲学」の方法に關して《ドグマ・批判》という対比が意識されていること、しかもそこで「批判哲学」が——カント独自のものというよりは——さしあたりロックを代表とするイギリス哲学の立場として捉えられていることが特に目を引く。

では、この場合、カントは何をもって哲学を「批判的」と言うのか。下って一七七二年の『フィリップ論理学』の序論では、同じ両項が次のように対比されることとなる。

彼「ヴォルフ」はすべてをドグマ的に決定し、すべてを定義しすべてを不可疑のものとみなしたことで、理性に大いに不利益をもたらした。彼は哲学が数学的方法でできると信じ、実際にまたそれを採り入れたのだった。

ロックはとりわけ、人間の全認識の起源とその制限を発生的 *genetisch* に見つけだすことにとめた人である。

彼は主体「基体」に即して subjective 哲学した。(XXIV 335)

ヴォルフとロックをそれぞれの立場の代表として、ここでは、定義から出発して論証に向かう数学的方法と、認識をその起源に遡って限界づける発生的手法とが対比されている。数学的・ドグマ的方法の無批判な使用から生じるドグマティズムを斥けることがカントの哲学的課題であったことから見ても、これらの記述に際してカントが「認識の起源とその制限」を問題するロックの側に与しているということはまず言ってよいものと思われる。

ただし、そうすると問題となるのは、ロックによる「批判」のポイントである。例えば上の『フィリップ論理学』の「発生的 genesis」という——「経験論」の立場を指すかのような——言葉は、『批判』第一版序文の冒頭部でカントがロックの「自然学、Physiologie」を「系譜学、Genealogie」(A IX)と呼び、ドグマティズムを斥けるのに不十分としていることからすれば、『批判』以前の未成熟な思想の表現とも取れる。しかし、他方で、こうした「純粹悟性概念」の出自をめぐる(ロックとは異なる)カント独自の理解が、既にこの時期に認められることも書簡等から知られている(vgl. X 130)。それゆえ、ここでの対比軸が《ドグマティズムと経験論》とは別のところに置かれているとの理解も成り立ちうる。

この点で注目されるのが、先の引用末尾の「彼は主体に即して subjective 哲学した」という一文である。このようにカ

ントは、ロックの方法をもう一方で、「subjective」というラテン語の副詞を用いて説明している。中世スコラ哲学の論理学・形而上学に発するこの術語が——デカルト的な物心の区別と重ね合わされて——「主観的」という意味で「客観的」の語と二元論的に対置されるようになるのは一八世紀後半のこの時期のことであり⁹⁾、とりわけ『批判』でのカントの用法は後世に大きな影響を及ぼすこととなるが、ここでのそれはさしあたり、領域を二元的に分かつそうした近代的な用法よりは、考察の観点に関わる旧来の用法により近い(それゆえひとまず「主体に即して」と訳した)。

この語を用いた説明は、同じ『フィリップ論理学』で次のようにより詳しく展開される。

ロックは悟性に道を拓くのに、何にもまして重要な歩みを踏み出した。彼はまったく新しい基準を告知した。彼は主体に即して subjective 哲学したのだが、ヴォルフや彼以前の人はみな対象に関して objective 哲学していたのだった。ロックは概念の由来、素性および起源をたずねる。彼の論理学はドグマ的ではなく批判的である。ヴォルフが問うたのは「靈魂とは何か?」ということだった。ロックは問う。「どこから靈魂についての観念は私の心へとやってくるのか?」[……](XXIV 338, XXVIII 176f.)

ヴォルフとロックの方法の内実はこのように、「ドグマ的」

と「批判的」の対比のもと、それぞれ「objective」と「subjective」という語によって示されている。前者が単純に「〜とは何か」と問うことで直接に対象に向かうのに対して、後者は問われている当の対象について、その概念の来歴を「どこから」というように問いの主体に折り返す形で問う。このとき「subjective」の語は、主観が客観かという二者択一によって主観の側につくということではなく、問題となつてい概念・認識の担い手を主題化するという態度・姿勢を指すものとして理解される。より端的には、所与の認識に即した自己認識という事態をこの語は指し示す。

そして少なくともこうした理解に関しては、カントは『フィリップ論理学』から一七八一年の『批判』を経てそれ以降まで一貫している。そのことは例えば一七八三年のものとされる『ムロンゴウイウス形而上学』の記述——「批判的方法は命題を対象に関して objective、ないし内容に関して検討するのではなく、主体に即して subjective 検討する」(XXX 779)——によつても確かめられる。つまり、この意味での「批判」ないし「批判哲学」とは、カント特有の思想的立場というよりは、カントが先立つロック等から——その伝達経路はここではひとまず措くが——学び¹⁰⁾、そして概念的に規定することとなつたある姿勢であり、思想的立場の違いを越えて広く共有されるはずのものである。

とはいえ、『批判』以降、カントが「純粹理性の批判」「超越論的批判」「批判主義」というように、自らの「批判」の《アプリオリ性》を強調していることも一方で確かである。カン

トのそうした「純粹理性の」批判、「超越論的」批判という立場から見ると、ロックの「経験的」なそれは「事実問題」に関わる「自然学」であり (vgl. A IX, XXXVIII 376f.)「批判」以前のものということになる。とすれば、「批判」とはやはり「超越論的批判」たるべきものということになるのではないか。

ある意味ではそうであるし、別の意味では必ずしもそうとは限らない、というのが本論の答えである。ここまで見てきたように、「批判」とは、ドグマティズムに陥ることを回避しつつ定説・学へと向かうべく、所与の認識の基準を認識者自身に即して探求する態度・姿勢をいうものであった。このときカントは、目指されるべき哲学の「ドグマ」を必当然的に確実なもの、すなわち「アプリオリ」なものと捉え、それに応じた認識主体（「理性」）理解にしたがつて探求を進める。このような問題構成にしたがつて限りでは、確かに「批判」は「アプリオリに可能である限りで」(B 25「強調論者」)われわれの認識様式に関わる「超越論的」なものであることになろう。しかしながら、これは上記のような「ドグマ」理解およびそれに応じた「主体」理解にしたがつてのこと、その問題構成自体は必ずしも「批判」の語の本質的契機というわけではない。むしろ、それは——『批判』が現にそのためにあるような——課題と言ふべき事柄であり、想定された認識・主体観の採否は、各人の置かれていた学問状況に即した「批判」を通じて初めて決しうるものである。「批判」にとつて「超越論的批判」は自明の前提ではない。本論は、カント

本人が「批判」について語る言葉から逆照射する仕方での、このことを浮かび上がらせようとするものであった。

*カントの著作からの引用は *Kant's Gesammelte Schriften*, hrg. von der Preussischen Akademie der Wissenschaft, Berlin, 1900ff. に拠り、巻号と頁数を記す。『純粹理性批判』については慣例にしたがい、第一版と第二版をそれぞれ A、B とする。原文強調は下線にちよび示し、本文中の表記ゆれ・誤記(例・Reguln, subjective など) は修正しなす。

【註】

- (1) 「超越論的」概念については、Hinske, N. (1968), "Die Historischen Vorlagen der Kantischen Transzendentalphilosophie," in *Archiv für Begriffsgeschichte*, 12, 86-113. 等参照。「批判」概念については下註(1)(a)のトネル、(2)のリー等の研究がある。「批判」の内実を「超越論哲学」と区別して考えようとする姿勢は Röttgers, K. (1975), *Kritik und Praxis, Zur Geschichte des Kritikbegriffs von Kant bis Marx*, Berlin: Walter de Gruyter, S. 25. 等にも見られる。ただし、いずれもカント自身の用例の調査・整理が十分でないため、概念の分析記述に不満を残す。本論はそれを補おうとするものである。
- (2) 典型として Vaihinger, H. (1970), *Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft*, Bd. 1, Neudruck der 2. Auflage, 1922. Stuttgart: Scientia Verlag Aalen, S. 23ff. 等参照。
- (3) Lee, Y. (1991), "Vom Typologie-zum Kampfbegriff. Zur Untersuchung des Begriffs *Dogmatisch* bei Kant," in Gerhard

Funke (Hrsg.), *Acten des Siebenten Internationalen Kant-Kongress Kurfürstliches Schloß zu Mainz 1990*, Bd. II, 2, Bonn: Bouvier, S. 481-487. ちよびこの区別の形成過程を扱ったものである。最終的に変化を《睿智界の認識可能性》をめぐるカントの思想形成によって説明する点で本論とは行き方を異にする。

(4) Liddell, H. G. and Scott, R. (ed.) (1968), *A Greek-English Lexicon*, with a Supplement, Oxford: Oxford University Press, p. 996.

(5) Vgl. Ritter, J. und Gründer, K. (Hrsg.) (1976), *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Bd. 4, Basel: Schwabe & Co. AG, S. 1249ff.

(6) 同くは Kemp Smith, N. (2003), *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*, 2nd. rev. and enl. ed., 1923, Hampshire: Palgrave Macmillan, p. 1 がイギリス経由の文芸批評、特にホーム(ケイムズ卿)からの影響を示唆している。

(7) カント以前の文献を細緻に論じた Tonelli, G. (1978), "'Critique' and Related Terms Prior to Kant: A Historical Survey," in *Kant-Studien*, 69, 119-148. 等から、同時のトネルの——いわゆる *ars critica* をもその内に含むような——論理学書からカントへの影響が推察される。紙数と資料の都合により、この間を埋める作業は今後の課題とする。

(8) この他「カタルティコン Kathartikon」「カノン」「予備学」「オルガノン」などの関連概念については Tonelli, G. (1994), *Kant's Critique of pure reason within the tradition of modern logic*, Hildesheim: Georg Olms Verlag. を参照。

(9) 同くは Karskens, M. (1992), "The Development of the Opposition

Subjektive and Objektive in the 18th Century," in *Archiv für Begriffsgeschichte*, 35, 214-256. 参考文献。

- (10) カントのロジックの成立について Brandt, R. (1981), "Materialien zur Entstehung der *Kritik der reinen Vernunft*" (John Locke und Johann Schultz), in Heidemann, I. und Ritzel, W. (Hrsg.), *Beiträge zur Kritik der reinen Vernunft: 1781-1981*, Berlin: Walter de Gruyter, S. 37-68. 本文転載は詳し。46頁註を主な検討については他日を期した。